

京都フィロムジカ管弦楽団



第1回 定期演奏会

ご挨拶

本日ここに「フィロムジカ管弦楽団」の記念すべき第1回演奏会開催を心よりお祝い申し上げます。今年3月末の結成以来、オーケストラメンバーの皆さんが音楽を愛する気持ちをひとつにして毎週練習に励み、今日この日を迎えられたこと、その感激はひとしおのことと思います。この感動を大切に今年からまた新たな第一歩を踏み出し、さらに努力と研磨を重ねて、大きく発展して欲しいと願っております。

これからの道にはアマチュアとして様々な困難もあるでしょう。けれども、それらを一つ一つ乗り越えていく事によって、音楽を通じた数多くのすばらしい出会いも待っているに違いありません。どうぞこの演奏会もメンバーの様々な気持ちが、音楽を介して最高に調和した“心のハーモニー”となって、ご来聴の皆様方の心に伝わります事をお祈り致しまして、私の挨拶とさせていただきます。

最後になりましたが、「フィロムジカ」の為に ご指導下さいました先生方をはじめ、各方面からご協力下さいました方々に、顧問といたしまして深く感謝いたしますと共に、今後共各界の御支援御鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

フィロムジカ管弦楽団 顧問 和田 之宏

本日はお忙しい中、京都フィロムジカ管弦楽団の第一回定期演奏会に御来場いただき、団員一同心から感謝申し上げます。

ほんとうに、ほんとうに、オーケストラは生き物だと思います。産む苦しみ、なんて大きな。この生長のための事柄を考えていくのもうひとつのオーケストラの意味ではないか、と思えますが実は私達全体がこの養うべき存在に包含されていることをまのあたりにするとき、変貌自在の器としてのオーケストラの生物性、厳しさといったことに圧倒させられます。器の生長と中身の成長がたゆみなく続きますように。楽しむと同時に、聴いてくださる方々になにかを感じていただけるような真摯な演奏をすることができますように。フィロムジカはまだまだ未熟なのでやらなくてはならないことがたくさんあります。これからだ！

最後になりましたが、本日の演奏会の開催にあたり御協力をいただきました高瀬、浜本両氏をはじめ関係者各位の皆様、御指導援助をいただきました諸先生方に厚く御礼申し上げます。

京都フィロムジカ管弦楽団 代表 小林香

世界の銘器を あなたののもとへ

あなたのパートナー選びは

ドルチェ楽器が お手伝いいたします。



株式会社ドルチェ楽器

〒530 大阪市北区茶屋町1-1 共信梅田ビル2・3F

Tel: 06-377-1117

☎フリーダイヤル 0120-755-700

営業時間: 10:30am~7:30pm 定休日: 毎週木曜日

京都フィロムジカ管弦楽団

第1回定期演奏会

96年10月19日(土) 13:30開場 14:00開演

京都府長岡京記念文化会館

PROGRAMM

ヴァーグナー：ニュルンベルクのマイスタージンガー第一幕への前奏曲

Richard Wagner: Die Meistersinger von Nürnberg
Vorspiel des I, Aktes

ブラームス：ハイドンの主題による変奏曲

Johannes Brahms: Variationen
über ein Thema von Joseph Haydn Op.56a

Chorale	St.Antoni	Andante	Var.V	Vivace
Var. I	Poco più animato		Var.VI	Vivace
Var.II	più vivace		Var.VII	Grazioso
Var.III	Con moto		Var.VIII	Presto non troppo
Var.IV	Andante con moto		Finale	Andante

— 休憩 —

メンデルスゾーン：交響曲第3番“スコットランド”

Felix Mendelssohn Bartholdy: III. Symphonie a moll Op. 56

I. Andante con moto—Allegro un poco Agitato
II. Vivace non troppo
III. Adagio
IV. Allegro vivacissimo—Allegro maestoso assai

指揮 滝本 秀信

客演指揮者紹介

滝本 秀信

1975年、トロンボーン奏者として京都吹奏楽団に入団。その後常任指揮者となる。1988年、日本吹奏楽指導者協会（JBA）の第3回指導者認定試験に合格。京都では唯一のJBA認定指導者となる（全国で8人目）。指揮を汐澤安彦、伊吹新一の各氏に、作・編曲、和声学を榎田朕之扶氏に師事。各方面の指揮者との交流を深める一方国外でも研鑽を積み、イタリア・レスピーギ音楽院にてクルト・レーデル氏に、ウィーン国立音楽大学にてリヒャルト・エデリンガー氏に、ウクライナ・シェフチェンコ歌劇場にてV・コジュハーリ氏に指揮を師事す。1996年3月、京都文化団の一員としてキエフのウクライナ国立管弦楽団を指揮し、好評を博す。

滝本氏は「オーケストラも吹奏楽もそれぞれの魅力を持っている。その良さを生かしてさまざまな可能性を追求しつつ音楽活動をしていきたい。」と語り、さらに、「ジャンルにはこだわらない。古典作品でも現代音楽でも、素晴らしい作品は多数ある。それらを数多く演奏していくことで自分の可能性を試していけるように頑張りたい。」と意欲を燃やしている。1996年4月、京都フィロムジカ管弦楽団にてオーケストラに取り組む。創立間もない当団に足繁く通ってトレーニングを行い、合宿では寝食をともにして交流を深める。こうして培った絆が今夜の定期演奏会でいかされ、オーケストラとの息の合った演奏がなされることが期待される。

コンサートミストレスの紹介

井上 史

史さんは音楽を黙々と吸収し、日常を黙々と感動し、肥えていくのです。静かではありますが、五感は全開。だから余計に彼女が時折発する大きな気持ちを説明するためのセリフが、私は好きです。コンミスとしての史さんが一番よく知っていることは、オーケストラを構成する単位が（プレイヤーひとりひとりが、あるいはパートが、あるいはセクションが、）それぞれ別であること、がしかし集まった単位は、それならではのひとつの音をつくる、ということではないかという風に思えます。それにしても彼女を語るための手段が文章とは、大変まどろっこしいことです。一度、是非フィロムジカに遊びにいらしてください、ぜひ。

（コ）

トレーナー紹介

田畑 佳子

福岡女学院高等学校音楽科卒業

現在、京都市立芸術大学音楽学部四回生

西口 勝

京都市立芸術大学卒業

西出昌弘、G・クラウスの各氏に師事

現在、京都市交響楽団団員




祝!



京都フィロムジカ管弦楽団

第一回定期演奏会



網谷正美	望月慶子	辻 文人	鳥越英則
藤原享和	徳永秀也	山崎 彰	濱 吉郎
奥田則之	木村良巳	野口貴三恵	
饗庭一慶	楠木幹浩	山田茂雄	西岡 茂
田中智子	大塚賢司	長根憲一	どらねこ工房

ヴァーグナー作曲

「ニュルンベルグのマイスタージンガー」

この曲は、次の動機をもっている。曲を聴く際、特に動機を意識する必要はないが、ストーリーのイメージをもちやすくするために紹介しておきたい。1. マイスタージンガーの動機、2. 愛の情景の動機、3. 行進の動機、4. 芸術の動機、5. 仕事の動機、6. 愛の動機、7. 情熱の動機、8. 陽気の動機これら8つの動機は、歌劇「マイスタージンガー」の内容を提示してくれる旋律であると言えるだろう。

まず、マイスタージンガーの動機をもって前奏曲が開始される。全音階で進行する旋律が、マイスタージンガーたちの大きな存在を感じさせる。そして、民衆のにぎわう歓声や興奮をイメージさせるかの様に高揚していき、愛の情景の動機に入る。フルートの澄んだ音色を初めとした木管楽器による旋律のかけ合いが、青年騎士と金細工師の娘の恋愛を物語っている。そして、この青年騎士の憧れであるマイスタージンガーの行進の動機が表れる。金管楽器を主体にしたこの動機は、マイスタージンガーらしく力強く、堂々とした旋律となっている。これは、四分音符を用いたことが要因となっていると言えるだろう。力強い行進の後には、芸術の動機へと移る。これは、マイスタージンガーの歌そのものを象徴するもので、楽譜上に大きな跳躍進行がないため、誰でもなじみやすい旋律であると言えるだろう。次に出てくる仕事の動機は、マイスタージンガーが職業をもった歌手であるということの意味が込められていると考えられる。そして調はホ長調になり、ここで愛の動機が表れる。先に出てきた、愛の情景の動機と異なるのは、ここでの動機は青年の強い愛の主張が込められていることである。転調したことによって、この動機浮き立つものになるのであろう。しかし、青年の心の中には、恋愛中には誰もが感じるであろう苦しくせつない気持ちがあった。それを表したのが、情熱の動機である。ここでは、八分音符と三連音符が交互に出てくることによって、不安定さをよく表現し、途中3回の転調の中にも複雑な青年の心境が、そのまま旋律として流れるという訳である。恋愛に関する動機が続いていたところへ、突然マイスタージンガーの動機が表れ、情熱の動機は一端停止することになる。再び出てきたマイスタージンガーの動機であるが、ここでは変ホ長調に移り、スタッカートで弱く演奏されることなどから、堂々たるものが感じられない。同じマイスタージンガーでも、ここで登場する彼らは、歌法の規則にこだわり、融通のきかない者達で、その上、青年の気持ちをふみにじろうとしているのであった。彼らと青年は、まるで戦っているかの様に、マイスタージンガーの動機と、情熱の動機が交互に演奏される。やがて、民衆が青年の気持ちに同感し、チェロによる陽気の動機となる。十六分音符と、八分音符の用いられ方が笑いを象徴していると言えるだろう。他のパートでもこの動機を受け継ぎながら、最後は十六分音符が高揚し、民衆と青年の一体感を感じさせ、再び、マイスタージンガーの動機が始まる。そして、さらに、行進の動機、愛の動機が加わり、3つの動機が同時に演奏される。これらの動機の楽器構成は、それぞれの特色を表現しやすいように工夫されていることが伺える。これらが激しく高揚していき、後に芸術の動機が加わる。各パートでこの動機を移しながら旋律を歌うと同時に最後への準備を感じさせる。そして結尾として、行進の動機が表れる。四分音符が中心で、これまでに出てきた中でもっとも力強さを感じる部分で、堂々たる行進をイメージさせるが、その中に音楽の流れを止めない弦楽器の演奏が効果的であるように思える。

この曲の魅力は、ストーリー性をもちながらも、決して音楽性を忘れない、そんなところにあるのではないだろうか。

ブラームス作曲

「ハイドンの主題による変奏曲」

この曲は、1つの主題と8つの変奏曲と終曲から成り立っている。

主題は、変奏曲の主題らしく、6度音程を主として和声がつけられた単純なものである。この主題は、それぞれ反復する2つの部分からできており、第1部は10小節で第2部が19小節である。第2部の終わりから、7小節目の変口の音は持続音とされており、最後の3小節では旋律音として、主題をしめくくる。

第1変奏は、主題で受け継いだ変口の音で開始され、ここでは連続して用いられる。それと同時に弦が、一方は八分音符で落ち着いて始まり、一方は三連音符でリズム感をもたせて始まるというように2声部に分かれて新しい旋律を表す。最後は、平面的ではなく、立体感のある音楽の雰囲気を感じることができる。

第2変奏は、主題で用いられた符点のリズムによって強く始まり、すぐに弱くなるので、今までの明るい雰囲気とは違い、暗くさびしい印象を受ける変奏である。しかしテンポが速いために、落ち込んでいく暗さではなく、何かを秘めたように聴こえる。1小節のフォルテとその後に続くピアノのパターンが繰り返され、ここでも最後は変口の音で結ばれる。

第3変奏は主題で用いられた符点のリズムがなくなり、八分音符によるゆるやかな旋律となっている。記譜されている音符も複雑なものではなく、緩やかに感じられる。途中で出てくる十六分音符のアルペジオは第3変奏におけるアクセサリ-的役割を果たしていると言えるだろう。

第4変奏は、オーボエとホルンによる新しい旋律で始まり、ときおり管と弦が役目を交替しながら演奏される。第3変奏に比べて音符も増え、旋律そのものは穏やかであるけれども、十六分音符による細かい動きがあるため、華を感じることができる。

第5変奏は、前の変奏とはまったく異なった性質をもっている。テンポも速くなり、スタッカートで用いられ方や、強弱のつけられ方などから、明るく、愉快的な雰囲気をよく表現していることが伺える。

第6変奏は、主題を転回した軽快な旋律で始まる。その伴奏として、弦によるピッツィカートで奏されるが、これは旋律に幅をもたせている。つまり、音楽の厚みをつくり出していると言えるだろう。

第7変奏は、また落ち着いた、穏やかな変奏曲である。旋律は、どこかの情景を思い浮かべてしまいそうな流れになっており、表題がつけられていたとしても、おかしくないのではないだろうか。

第8変奏の特色は、全体的に弱く、強い音がないということであろう。1つ1つの音が繊細で、神秘的な響きを出している。最後の7小節は変口の音が持続される。この音はこれまでに出てきた変口の音のまとめの様な集結と、終曲に向けての準備音という意味をもっていると言えるだろう。

終曲は、全曲の結尾というだけあって、これだけで1つの曲となりそうである。チェロとコントラバスで奏される旋律は18回も繰り返される。音は単純なものであるが、その上に次々

と新しい旋律が表れるので、それと共に響きや流れを音楽的につくり出している。後半は、グリッサンドによって高揚され、ここでも変口の音は大切に用いられている。一端静まった後、すぐに元のテンポに戻り、力強く輝かしく、全曲を終了する。

一見、単純そうな旋律が、色々な形で展開され、表現できるという、音楽の底の深さを知らされたような気がする。

メンデルスゾーン作曲

「交響曲第三番 “スコットランド”」

－第1楽章－

メンデルスゾーンは、ホリルードの古城を訪れたことがある。以前、殺害事件のあったその古城のあたりは全て壊れ、荒れている中、明るい光がさしこんでいる神秘的な雰囲気から、第1楽章の冒頭部分を考えついたのであった。この冒頭の旋律は、1つ1つの音をとてもいいに置いていくように感じる。静けさの中に響くハーモニーには情景を思い浮かべさせられる。第1楽章では、第2主題の伴奏として第1主題が用いられるという変わった手法となっている。

後半、嵐のような場面を呼び起こすところがあるが、半音階的進行で、強弱も極端につけられているのでとても効果的である。そして最後は冒頭で出てきた旋律が思い出されたかのように表れ、第1楽章を終える。

－第2楽章－

スコットランドの舞台を思わせるような主題をもっており、第1主題はクラリネットから、各楽器に引き渡される。まるで、人々の会話のようである。第2主題は、スタッカートが軽快さを表現し、明るい気分にしてくれる旋律となっている。

－第3楽章－

第2楽章とは異なり、ものわびしい雰囲気が感じられる。第1主題は、カンタービレと記されているが、歌えば歌うほど、心にしみる旋律である。第2主題は、符点のリズムを用いて、不思議な空間へ誘い込まれるような気分になる。これは次第に、楽器の数が増え、高揚して、最後は、重々しく終了する。

－第4楽章－

全体的に暗い印象を受ける中で、戦闘的な主題が表れる。これは、住民達が戦う様子を描いているのだろうか。単純なリズムの途中に細かい符点のリズムが出てくると、戦いを挑んでくる住民の現れを感じる。最後のコーダでは、全体的に音域も高く、高らかに歌われ、力強く終わりをむかえる。

切れ目なく演奏することが求められているので、各楽章の最終音は、終わりであり始まりの雰囲気を出す必要があるように思う。これらの音をどう奏するかによって、聴き手の印象が変わるのではないだろうか。

都ホテル・新都ホテル専属

岐陽館

小林祐史写場

〒604

京都市中京区寺町通丸太町下ル

電話 (075) 231-1471

FAX (075) 231-1471

パート紹介

ヴァイオリン

皆さんはヴァイオリンについて、どのくらい御存知でしょうか？この場を借りて、少しばかりヴァイオリンの「運弓」について、紹介させていただきます。

ヴァイオリン奏者を御覧下さい。右手に持っている長い物が「弓」で、馬のしっぽの毛が張ってあります。演奏者は、左肩にのせたヴァイオリンの弦を、この弓で擦って音を出すのです。弓の毛が弦にうまくひっかかるように、演奏の前には、普通松ヤニを弓の毛に塗り付けます。しかも、これだけで良い音は出せません。弓の手元の方にあるねじを回して、弓の毛を適当に張り、手首と指先と腕をうまく使って、弦に最適の圧力をかけなければなりません。そして、一定の速度で、弦に対し垂直に、まっすぐ弓を動かす—この一連の作業を「運弓」と呼びます。これほど大変な作業をこなしているわけですから、少々ミスは御容赦の程を！では私たちの演奏、ごゆっくりお楽しみ下さい。 (津田篤太郎)

ヴィオラ

ヴィオラは、人間の声に最も近い音色と言われ、そのためかオーケストラの中であまり目立ちません。しかし、そのように人知れずオーケストラ全体の音色に深みを持たせる役目こそが、ヴィオラの大きな魅力でもあります。言わばオーケストラの名脇役です。しかし驚くなかれ、今回のメンデルスゾーンはヴィオラがヴァイオリンを凌ぐのではないかというくらい主役として活躍します。ので、ご期待ください。 (b~y E)

チェロ

チェロは万能の楽器で、オーケストラでは様々な事を担当します。基本的には低音部に位置していて和音を支えています。時には大変美しいメロディも奏でます。弦楽器では1st Vnに次ぐメロディ楽器でしょう。また、音色がどの楽器とも溶け合うので、木管、金管楽器と同じ動きをして、オーケストラ全体の潤滑油的な働きもしています。

この楽器を駆使して本日の演奏会に臨むパート員は現在4人です。楽団設立当初からのメンバー小野田は2ヶ月間一人でチェロを弾いていて、div. ができずに淋しい思いをしていました。しかし、6月に入り村上君と小松君の頼もしい若手2人が入団して充実の兆しを見せると、8月の終わりに岡原さんが入団して今日を迎えることができました。そして、我々をサポートして下さるエキストラの面々を加えて、フィロムジカの潤滑油となるべく頑張ります。 (小野田)

コントラバス

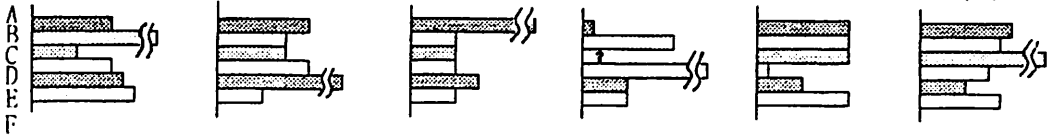
コントラバスはオーケストラの中で常に最低音域を担当します。それだけにハーモニーの厚みを増す重責を負っているという自負が各メンバーにあります(たぶん)。巨大な弦楽器ゆえの悩みは深刻で、御覧のとおり大きいため保管と運搬が非常に重労働です。通常は自動車を選びます(いつも手伝って下さる皆さんありがとうございます)。しかし、普通の自家用車の場合、車に積むのもひと仕事です。ハッチバックの後部扉を開けて、全ての座席をたおして、ていねいにかつづくで(?)車内に押し込むことになります。こういった労力は全てのコントラバス奏者がよく知っていることなので敢えてパート紹介に書かせていただいたわけです。最近練習場にほど近い団員さんの御屋敷に置かせていただいております(いつもいつもありがとうございます)。練習日の1時間前後には寺町丸太町辺りを巨大な楽器を持ってヨロヨロと自転車に乗る私の姿をお目にかけることがあるかもしれません・・・ (伊藤)

フルート

-フルートパート6人の傾向と対策-

<傾向>

● 技術 ● 練習の出席率 ● 酒乱度 ● 幸福度 ● 女らしさ ● 年齢



<対策>

どうでもええけど、もっと練習しましょう (by 一応パートリーダーな Y.K)

注: この紹介文は、筆者の独断と偏見により書かれたものなので実際とは多少異なることもあるとかいう噂です。

オーボエ

オーボエは大変表情豊かな楽器です。ある時は軽やかに楽しく踊り、またある時はホール全体を涙で覆うような寂しげな声で唄います。今夜の曲目はいずれもそのようなオーボエの魅力を引き出した名曲です。皆さんオーボエと一緒に泣いたり笑ったりして下さい。(遠藤)

クラリネット

「クラリーノ (トランペット) より美しいからクラリネットというのだ」という話を聞いたことがあります。確かにクラリネットは艶のある美しい音です。しかしクラリネットの魅力はそれだけではありません。太く落ちついた音色はブラームスやメンデルスゾーンのような作品で渋い音を作るのに欠かせない楽器なのです。(遠藤)

ファゴット

「まず、君たちはファゴットという楽器の名前を覚えなければなりません。この茶色と銀色の混ざった楽器は実は木の管とそれを覆うキーの集まりなのです。」先生はこう言って、その楽器を僕達に示された。それは一見すると、ただの長い茶色の棒にしか見えなかった。「では音を聞いてみましょう。」先生はそのファゴットを体の前で斜めに構え、神妙な顔つきで、口をつけ、音を出された。それは、ああ、何というやわらかく豊かな、温かい音色だっただろう。「この楽器はこのリードという小さい笛のようなものを楽器につけて音を出すわけです・・・」

それから後の説明はうわの空で僕はうっとりとその楽器を見つめていたのだった。(高山)

Italian, French & German
STRINGS and BOWS
and other kinds of musical instruments



Americaya
KYOTO SINCE 1945



アメリカヤ楽器店
〒603 京都市北区地下鉄北大路駅前
TEL 075(441)2341 FAX 075(414)0010

ホルン

やっぱりホルンだ。

だってホルンだもん。

しかしホルンなんだ。

練習に遅れても、音を外しても、原稿の締め切りに遅れても、これだけで許されてしまうのって、やっぱりフィロムジカーのおじさん人口を誇るから...? (涙)

こういう感じでみんなホルンを好きになりました。

でもってホルンはカタツムリに似ています。

要するに、オーケストラでホルンは一番楽しいのだ。 (7月まで23歳最年少)

トランペット

ジャズもおまかせ、バーリーのU氏

「さて問題です。メン3のとある箇所 Trp. が喋っています。それは一体どこでしょうか? お分かりになった方は、アンケート用紙へご記入下さい。」

ブルックナー評論家のE氏

「手製のペットスタンドを愛用しています。特許申請中(?!)です。興味を持たれた方は、アンケート用紙へどうぞ。価格は相談に応じます(笑)。」

天下一品の音色の持ち主、W氏

「楽器は演奏者の感情に正直だよねえ。私はいつも楽しんで演奏したいな。練習だって楽しみたい。今日は本番。目一杯楽しみます! 乞うご期待!」

とても最年少者とは思えないしっかり者、K氏

「バー練しましょ。そうだ、みんなで鴨川行きましょうよ。やっぱり思いきり吹きたいですしね。練習、練習。」

一番の問題児、M

「今まで、愛が足りなかったみたい...。決心しました。わたし、トランペットを愛します♥」

by あ・す・か ♥



専門学校の存在意義は、好きなこと、一番興味のあることを一生懸命に勉強する事にあると私は考えます。特に専門的な知識や感覚、感性といったものを要求される音楽業界で、プロとして評価されるには、あふれんばかりの情熱が必要です。夢を具体的なカタチにするための努力は、私達は惜しみません。業界の最前線にいる多くの先輩たちが、その証です。

学校法人 大阪音楽学園 (大阪府認可の専修学校)
CAT キャットミュージックカレッジ専門学校

●音楽芸術専攻 ●音楽専攻 ●電子オルガン専攻 ●ピアノ/インスト/クラシック専攻 ●音楽ビジネス専攻
●コンピュータ・ミュージック専攻 ●ボーカリスト専攻 ●JAZZ/録音専攻 ●総合音楽専攻
●ボーカル専攻 ●作・編曲専攻 ●舞台芸術専攻 ●音楽映像専攻

江坂総合校舎/〒564 大阪府吹田市墨本町3丁目29番18号 TEL:(06)369-1101

トロンボーン・チューバ

トロンボーンとチューバは今回は一曲しか登場しません。選曲当時、メンバーが一名しかいなかったことが理由だそうです。しかし現在では団員3名(男2人、女1人)に増え、トランペット、ホルンパートにはかなわないものの楽団内で確実に存在感を高めつつあります。

さて、トロンボーンやチューバはオーケストラでどんな役割を果たしているのでしょうか。

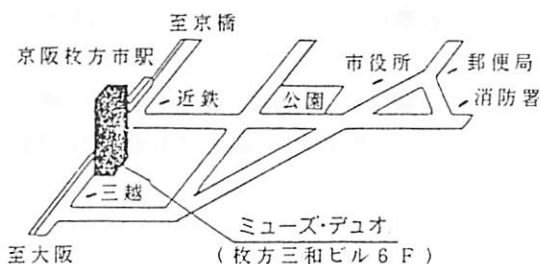
トロンボーンが本格的にオーケストラに登場するのはロマン派以降です。だからベートーベンの交響曲にはトロンボーンはほとんど登場しません。

しかしロマン派になり、トロンボーンがオーケストラに本格的に用いられるようになると、音楽は厚みをました、素晴らしいものになりました。そう、トロンボーンなしで音楽を語ることは不可能なのです。たとえ1時間の交響曲で楽譜が2ページしかなくても、一曲の中に4分音符1つしかなくても……。がんばれ、トロンボーン!!

(名嘉原)

MUSIC GALLERY DAITO

ヤマハピアノサロン DAITO
Muse duo



大東楽器株式会社

〒573 枚方市岡東町18-21/枚方三和ビル6F
(枚方三越横)枚方市駅南口 ☎0720(41)5000(代)

大東楽器株式会社

本社	〒574 大東市住道2丁目2番2305号	☎0720-73-7121
大東支店	〒574 大東市住道2-2-405	☎0720-73-0006
寝屋川支店	〒572 寝屋川市八坂町16-4樋口第5ビル	☎0720-28-0651
枚方支店	〒573 枚方市岡東町18-21枚方三和ビル	☎0720-43-0621
枚方北支店	〒573 枚方市楠葉並木2-23-6 インディアンビル	☎0720-51-2681

座談会

ヴァーグナー ニュルンベルクのマイスタージンガー 第1幕への前奏曲

遠藤 (トランペット) この曲は、前奏曲だけで入学式や壮行会などに使われる、ヴァーグナーのなかでも特にポピュラーな曲ですよ。

名嘉原 (トロンボーン) 先日、スイスのルツェルンにあるヴァーグナーの作曲小屋に行っただけですけど、そこから見える風景は、この曲の持つ勇ましさや力強さとは程遠いおだやかで牧歌的なものでした。

小野田 (チェロ) チェロの立場から言うと、この曲はチェロに金管がかぶさっているので報われない感じがしますよ。

前田 (ホルン・練習指揮) ホルンとチェロは音域が近いから、重なることで響き作り易くなりますね。

遠藤 そんなところにもヴァーグナーの才能が現われているのかもしれないですね。トランペットとしても旋律が歌いやすく演奏し易いと感じます。

小野田 ヴェルディはいいメロディがあって演奏し易いですが、ヴァーグナーは全体的に動きが細かすぎて大変ですね。

遠藤 同じ劇音楽の作曲家にも個性の違いが現われているようですね。ところで、この曲では歌謡的な部分や行進曲風の箇所など、様々な旋律が出てきますね。

前田 そうですね。「マイスタージンガーの動機」(譜例1)「行進の動機」(譜例2)「芸術の動機」(譜例3)「愛の動機」(譜例4)などがあるが最後に重なりあって出てくる。

遠藤 曲の中の様々な旋律が、終わりになって重なり合うことで作り出されることで生まれる盛り上がりや聴きどころの一つですね。

名嘉原 でもここまで来ると息も絶えだえになっちゃいますよ。本来ならこの後で3時間の楽劇を演奏しなくちゃいけないのかと思うと気が滅入ります。

遠藤 その楽劇は、最後は芸術の素晴らしさを賛美することで締めくくられるんですよ。そうした意味でこの曲は、これから芸術活動をしていこうとする僕たちの出発を飾るのにふさわしい曲だとも思います。

ブラームス ハイドンの主題による変奏曲

小野田 (チェロ) ブラームスのこの曲はオーボエとファゴットで主題をつくるという古典的な楽器の使い方をしていますね。(譜例5) ブラームスが自分の時代よりずっと古い旋律を使っているせいもあるのかな。

前田 (ホルン) この旋律は本当にハイドンのものかどうかはわからないですよ。ところで、この曲はホルン奏者としては恐い曲ですよ。ヴァーグナーなら少々音程が狂っても鳴らし切ってしまうとかなるけど、この曲ではごまかしがきかない。

遠藤 (トランペット) 細かくてきちっとした曲といった印象を受けますね。

木下洋輔 (ホルン・練習指揮) 木管五重奏に弦が加わった感じで、管はみんな大変そうですね。

ね、あと二重対位法とかいうのが多いんですね。はっきり知らないんですけど、メロディーがとにかく二つありまして、交互に楽器が入れ替わるんだとか、...例えば、冒頭のオーボエのメロディーと、同時に弦が出している別のメロディーが、途中で入れ替わる（譜例5）んです。終曲で最初にコントラバスが出す旋律（譜例6）も二重対位的に扱われていますね。演奏者としても、別の楽器からもらった旋律をどう処理してやろうかなんて考えると楽しいものですね。

小島（チューバ）低音の主題が膨れあがっていった曲をつくるというのは、クラシックの中でも正統派の技法だと思う。

小野田 チェロではシのフラットの音を出すのが重要な役目ですね。この曲はシのフラットが大切。特に終曲では、僕らが全然変わらずにシのフラットの音を出している上に色々な楽器が様々な変奏曲を展開をしていく。変奏曲では低音は変化はしないが下で支えるという重要な役目があります。ところで、この曲は同じブラームスの第4交響曲に通じるものがありますね。

遠藤 確かに4番の終楽章はパッサカリア（変奏曲の形式のひとつ）ですね。

小島 パッサカリアはバッハの時代にさかのぼる形式だと思う。バッハのハ短調のパッサカリアは金管アンサンブル用に編曲されるなど大変な名曲だ。

遠藤 この変奏曲にはブラームスの古典趣味が現われているというところですね。でも聴いていると結構響きが前衛的に感じたりもする。単なる古典趣味ではないブラームスの独自性が出ているように思います。

メンデルスゾーン 交響曲第3番「スコットランド」

木下洋輔（ホルン）この曲では弦楽器の中でもヴィオラが中心ですね。（譜例7）

小野田（チェロ）渋いですね。中音域が中心になり、華やかではない憂いのある響きになっている。

小島（チューバ）しかし、その華やかではない響きがまた心地よい。これがメンデルスゾーンの良さかな。

木下 ホルン吹き立場としては、ヴィオラと同じことをホルンに要求してくるのでめちゃくちゃ辛いんですね。細かく吹かされたり和音をやらされたり、まるで便利屋のように使われてますよ。たぶんメンデルスゾーンがあまり考えずに中音域が欲しかったからホルンを使っただけじゃないかなってきがしますね（笑）。

井上史（コンサートミストレス）ヴァイオリンの旋律は演歌みたいで（譜例8）、弾きながら赤面してしまう（笑）。

木下 そういえばドヴォルザークも演歌になっちゃいますね。

小野田 だから日本人に好かれるのかな（笑）。

小島 クラリネットが弦をリードするという独特なオーケストレーションにも驚かされる。

木下 この楽章はスコットランドの何をイメージしているのかな。

小野田 廃墟じゃないですか。お城などの。

前田（ホルン・練習指揮）2楽章の聴きどころは16分音符のリズム感と、ホルンの牧歌的な旋律（譜例9）による締めくくりですね。

小野田 この楽章は暗い第1楽章とは違って明るいんですね。

木下 ヴァイオリンが活躍するのはこの2楽章だけじゃないかな。

小野田 細かい音になると低弦はどうしても不利ですからね。

遠藤 (トランペット) トランペットは刻んでいるだけなんですけどそれも結構楽しいんですよ。やっぱり曲の出来がいいのかな。

小野田 弦楽器は楽しんでる余裕はない (笑)。

井上 音の数が多いい (笑)。

木下 本当に音の数が多いい。これに極端な強弱の幅をつけたらチャイコフスキーみたいになるんじゃないかな。でもそうならず平坦なところがメンデルスゾーンですね。

小野田 第3楽章は、チェロが旋律を弾ける、と思ったらホルンがかぶさっていたんですよ。(譜例10)

木下 でも酸欠になりそうですけど... (笑)。

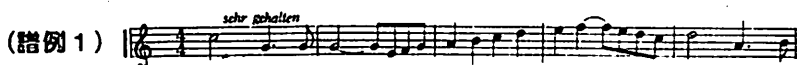
小野田 メンデルスゾーンはメロディーの息がすごく長いですね。この点がブラームスなどとは違う。


木下 管楽器はどこでプレスを取るかが大切になりますね。

遠藤 4楽章になってトランペットは初めて旋律が吹けるんですよ。このホルンの副旋律もまたいい。(譜例11)

木下 4楽章では3連符が出てきて新鮮ですね。それとメンデルスゾーンはアウフザッツがやたら好きですね。(譜例12)

前田 私はスコットランドへ行ったことがないけど、それでもスコットランドの緑の中の風景が目に見えてくるような名曲だと思います。



(譜例 7) Viola 

(譜例 8) VI. I 

(譜例 9) Cor. 

(譜例 10) Cor. 

(譜例 11) 

(譜例 12) VI. I 

**SOUND
CREATE**
by MIC 楽器

ピアノ・電子オルガン 専門店

- ・ 調律、修理
- ・ 音楽教室

▶ JR・地下鉄天王寺駅南へ5分

大阪市阿倍野区阿倍野筋3-10-1-200
あべのベルタ2F

☎ 06 (647) 3012

京都フィロムジカ管弦楽団

~ **Philomusica Orchester Kyoto** ~

代表	小林 香	顧問	和田之宏
コンサートミストレス	井上 史	低弦セクションリーダー	伊藤文詔
木管セクションリーダー	井上裕子	金管セクションリーダー	前田 暢
音楽理論	高嶋友子		

コンサートスタッフ

ステージマネージャー

政岡 潤平

隈部 洋平

会場

名嘉原 忠博

チケット

酒匂 美奈子

プログラム・印刷

若林 稔

遠藤 啓輔

広報

村上 直

井上 裕子

記録

小松 正明

表紙・チラシ

上田 浩之

プログラム協力

遠藤 啓輔

木下 洋輔

事務局

事務局長

石川 美穂

総務

松永 淳

広報宣伝

堀越 三津弘

広報広告

河本 紗代子

会場

奥村 繁海

合宿

名嘉原 忠博

楽団史・機関誌

村山 義尚

財政

上田 浩之

ライブラリアン

井上 あゆみ

高田 志保

小又 雄一郎

印刷所

大地社

旭堂楽器店

～旭堂はこんな仕事もしています～

◆ピアノの調律・修理・オーバーホール

◇ピアノのクリーニング

(御婚礼・御引越に)

◆ピアノの運搬・保管の斡旋・紹介

◇ピアノ・電子オルガンのグレード認定

◆ピアノ・電子オルガン教室の

生徒募集応援

◇テグニートン指導者養成

◆防音相談

◇サンホール(120名収容)の運営



ASAHI-DO

京都市中京区寺町通爽川上ル

TEL(075)231-0538 (代)

■営業時間/午前9時～
午後7時

■月曜定休

団員表

Violinen	田中 めぐみ (客演)	Kontrabässo	Hörner
浅利 雅子		小林 祥子	芦原 俊平
石原 恵子	中島 悦子 (客演)	○伊藤 文詔	木下 高好
井上 あゆみ	平松 晶子 (客演)	安田 博子	○木下 洋輔
○井上 史	松村 桃子 (客演)	吉本 政弘	小又 雄一郎
井上 理恵	村上 桂子 (客演)	和田 充代	永尾 太郎
上田 松子		関塚 紀子 (客演)	長岡 武志
上村 宏樹	Violen	昌山 順一 (客演)	藤原 義和
岡本 有加	井上 拓		前田 暢
川端 さとみ	○西川 直哉	Flöten & Piccolo	Trompeten
北村 典子	池田 有佳 (客演)	石川 美穂	○上田 浩之
国分 貴之	岩岸 優子 (客演)	井上 まこと	遠藤 啓輔
小間 敦世	岩倉 陽子 (客演)	井上 裕子	小林 香
高見 真己	高橋 英史 (客演)	○隈部 洋平	村上 明日香
津田 篤太郎	富森 麻有 (客演)	酒匂 美奈子	渡辺 美智子
津田 和子	藤村 崇 (客演)	政岡 潤平	
長坂 絵理子	宮川 眞紀子		Posaunen
野口 彩子	(客演)	Oboen	坂本 倫子
平本 知子	横山 智昭 (客演)	○岸 さやか	○名嘉原 忠博
宮下 康子		大利 一郎 (客演)	宇佐美 勝也
村山 義尚	Violoncellen		(客演)
吉野 仁子	岡原 寿子	Klarinetten	
若林 稔	○小野田 税	秋野 希和子	Tuba
五十嵐 満美子	小松 正明	佐藤 郁子	○小島 忠司
(客演)	村上 直	○山下 由美子	
大塚 真衣 (客演)	鈴木 志保子	末廣 牧子	Pauken
小倉 博 (客演)	(客演)	Fagotte	森 路佳 (客演)
高橋 太郎 (客演)	竹島 開 (客演)	○高山 泉	
田川 真理 (客演)	中村 由起 (客演)	中口 佳子	
田中 あゆみ	湯浅 雅美 (客演)		
(客演)			

○ . . . パートリーダー

謝辞

当団の活動に多大な御支援を下さいました高瀬博章様、浜本香代子様の御二方にこの場を借りて御礼申し上げます。



次回定期演奏会のお知らせ

第2回定期演奏会

97年3月16日(日)

京都府長岡京記念文化会館

指揮 蔵野 雅彦

曲目 ブラームス「交響曲第2番ニ長調」 ほか

団員募集中

募集パート

弦全般、オーボエ、ファゴット、トロンボーン、打楽器

連絡先：075-721-1832 (小林)